

令和5年度学校経営計画

令和3年度～令和5年度(3年目)

校番	202 127	学校名	広島叡智学園中学校・高等学校	校長氏名	福嶋 一彦	全日制課程	本校
----	------------	-----	----------------	------	-------	-------	----

1 教育目標

「学びの变革」の目指すべきモデルとなる学校として、学びを通じて平和な社会づくりを実現し続ける存在となることのできる人材を育成します。

2 育てたい(幼児・児童)生徒像

社会の持続的な平和と発展に向け、世界中のどこにおいても地域や世界の「よりよい未来」を創造できるリーダーとなる生徒を育成するというビジョンの下、次の①～⑤の5つの資質・能力の育成を目指す。

- ① 様々な場面で活用できる知識・技能の深い理解
- ② 新しい価値を生み出す創造的・批判的思考力
- ③ 異なる文化・価値観を持つ人々と協働する力
- ④ 目標に向かってやり抜く力・自信
- ⑤ 日本語でも英語でも議論・協働できる高い語学力

3 中期(3年間)経営目標 ※教育活動その他の学校運営に関する目標

- (1) 国際バカロレア教育 (IB プログラム) を、教育活動の主たるツールとして充実を図り、本校の教育目標の達成を目指す。
- (2) 教科横断的で探究的な学習活動を展開することにより、主体的・対話的で深い学びを実現する。
- (3) 寮生活における多種多様な人とのコミュニケーション活動等を通して、将来のリーダーとしての人格の陶冶に努める。

4 短期(本年度)経営目標及び行動計画等 ※中期(3年間)経営目標を達成するための本年度の経営目標及び行動計画等

中期(3年間)経営目標				
(1) 国際バカロレア教育 (IB プログラム) を、教育活動の主たるツールとして充実を図り、本校の教育目標の達成を目指す				
短期(本年度)経営目標	本年度行動計画	評価指標	現状値 (前年度)	目標値
IB プログラムを導入した本校のアイデンティティが具現化した姿を、生徒、保護者、教職員それぞれが、交流等を通して目指す学校の姿を自らの言葉で表現するとともに、自らが関与した行動や活動について、その目的や内容を説明することができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員研修を実施し、本校のアイデンティティが具現化した姿を共有する。 ・留学生の保護者も意識した情報発信を行い、本校の目指す姿と教育活動の関係性を示す。 ・留学生を含めた生徒全員が、活動の目的と本校の目指す姿の関係性を振り返る活動を意識的に取り入れる。 	ルーブリックを用いた自己評価 (生徒・保護者・教職員対象 4段階)	3.1	3.1
日本の学習指導要領と IB プログラムを融合させた指導と学習の充実を図るために、学校の示す方向性を基に、IB 推進チームと教科会の間で適切なコミュニケーションを行うなどして、校内組織の活性化が図られている。	<ul style="list-style-type: none"> ・MYP チーム会議、DP チーム会議の定期的な実施と各教科会への効果的な接続を行う。 ・MYP チーム会議、DP チーム会議において、教科横断的な実践共有を行う。 ・各教科会を定期的かつ効果的に実施する。 	教職員対象アンケート	90%	90%
校外の様々な人的・物的資源を活用したプログラムの実施により、IB プログラムの充実が図られている。	<ul style="list-style-type: none"> ・島内企業におけるインターンシップやの島のニーズを捉えた SA を実施する。 ・各教科における校外の資源を活用したカリキュラムの充実と改善を図る。(他校連携を含む。) 	ルーブリックを用いた評価 (校外関係者からのフィードバックを対象 4段階)	—	3.0

中期(3年間)経営目標				
(2) 教科横断的で探究的な学習活動を展開することにより、主体的・対話的で深い学びを実現する				
短期(本年度)経営目標	本年度行動計画	評価指標	現状値 (前年度)	目標値
授業での学習活動に、見通しを持って粘り強く取り組み、その学習をまとめ、振り返って次につなげたり、仲間や地域の方々との対話や協働を通じて考えを広げたり深めたりすることができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ATL スキルを用いて、各学年で目指す姿を、生徒及び教職員で共有する。 ・授業などの教育活動において ATL スキルが発揮され、伸長できる指導と学習を実践する。 ・ATL スキルの伸長に関する評価を定期的に行い、必要に応じて焦点化した指導を実践する。 	ルーブリックを用いた自己評価 (生徒・教職員対象 4段階)	平均値 3.1	平均値 3.2

<p>正解が存在しない実社会の問いに生徒が向き合い、その課題解決に向けて収集・精査した情報を基に、授業で身に付けた知識・技能を活用して、自らの考えを形成し他者に表現できる、MYPの4年間を見通したプログラムを開発し、それを実践・検証する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ルーブリックを用いて、各教科の教科横断的な資質・能力を高める指導計画の充実を図る。 ・MYP及び未来創造科の集大成となるパーソナル・プロジェクトの実践を通して、MYP段階で育成する課題発見・解決能力を明確化するとともに、その実践を振り返り、未来創造科のカリキュラムの改善に活かす。 	<p>ルーブリックを用いた自己評価（教員対象 4段階）</p>	<p>平均値 3.2</p>	<p>平均値 3.2</p>
<p>教員一人一人が「教科横断的で探究的な授業づくり」を行うために必要な研修プログラムの開発を推進するとともに効果的な指導方法や教材開発の共有化を図る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・恒常的な授業交流を行うことができる教員研修計画に基づき、それぞれの教員が、自らを高めるための研究・研修に積極的に取り組み、自己変革できる教員集団を目指す。 ・IB教育に初めて従事する着任者に対して、各教科主任とIB推進チームが協力して、単元づくり等において周囲からのサポートやフィードバックを得やすい環境や機会を提供する。 	<p>ルーブリックを用いた自己評価（教員対象 4段階）</p>	<p>平均値 3.0</p>	<p>平均値 3.0</p>

中期（3年間）経営目標				
(3) 寮生活における多種多様な人とのコミュニケーション活動等を通して、将来のリーダーとしての人格の陶冶に努める				
短期（本年度）経営目標	本年度行動計画	評価指標	現状値 (前年度)	目標値
<p>集団への所属感や連帯感を深め、集団の構成員であることを自覚し、人と人との触れ合いやつながりを深めていくことができるようにする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒会活動と寮での係活動とを関連付け、一人一人がリーダーとフォロワーの両面を経験し、様々な役割に対して、責任感を持って取組み、集団生活の安定に向けて貢献できるようにする。 ・自発的に集団生活におけるルールやマナーを守り、個の役割を責任持って実践できる寮の組織づくりを行う。 	<p>生徒アンケート調査における肯定的回答の割合</p>	<p>89%</p>	<p>95%</p>
<p>生徒一人一人が、寮生活におけるきまりを厳守し、主体的に規律ある生活を通して、安心して充実した寮生活を送れていると感じることができるようにする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・寮則の意味や目的を考えさせ、何のために守らなければならないのかを理解し実践できるような機会を創出し、評価場面を設定する。 ・異年齢集団での交流や寮スタッフとのコミュニケーションの充実を図るための機会を通して、協働することや、他者の役に立ったり貢献したりすることの喜びを得られる活動を充実させる。 	<p>生徒アンケート調査における肯定的回答の割合</p>	<p>93%</p>	<p>95%</p>
<p>生徒一人一人が、自己の健全な生活を実現するために、食に関する意識を高め、望ましい食習慣を身に付けている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・日々の食事指導及び食に関する指導を行い、食事のマナーや望ましい栄養などの食生活に関する正しい知識を習得させる。 ・地場産物を活用した郷土料理の提供を通して、食事に興味・関心をもたせる。 	<p>生徒アンケート調査における肯定的回答の割合</p>	<p>84%</p>	<p>88%</p>

働き方改革に関する短期（本年度）目標

短期（本年度）目標	本年度行動計画	評価指標	現状値 (前年度)	目標値
<p>教員が、子供と向き合う時間が確保されていると感じることができている。</p>	<p>子供と向き合う時間の定義について、全体研修等で理解を深め、この時間の確保のために必要な方策を検討し、実践する。</p>	<p>業務改善アンケート項目における肯定的回答の割合</p>	<p>92%</p>	<p>95%</p>
<p>教職員全員が勤務時間に対して高い意識を持ち、時間外における勤務を縮減している。</p>	<p>本校において設定した入退校時刻を意識した業務遂行ができるよう各分掌や学年で検討し、好事例を全体で共有する。</p>	<p>一月当たりの時間外勤務時間が45時間以下の教職員の割合</p>	<p>82%</p>	<p>100%</p>
<p>教職員に対して、全体・学年・分掌において、形態を工夫しながら、働き方改革に関する研修を実施している。</p>	<p>働き方改革取組方針等について、全体研修等で十分理解を深めるとともに、自らの取組状況を振り返り、課題や対策を見出す機会を設定する。</p>	<p>各学年・分掌において、年間2回研修を実施する</p>	<p>16回</p>	<p>20回</p>

別紙：現状分析

①	<p>国際バカロレア教育（IBプログラム）を、教育活動の主たるツールとして充実を図り、本校の教育目標の達成を目指す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昨年度、4年間のMYPプログラムを1期生が修了し、ディプロマプログラムが1月より始まるなど、年間を通して国際バカロレア教育を用いた教育活動の充実を図ることができた。特に、ディプロマプログラムの開始は高等学校1年生だけでなく、中学生にも大変良い刺激となっている印象を受けている。 ・令和5年度は、完成年度に向けた校内指導体制の確立と新たな挑戦が必要な一年となる。ディプロマプログラムを軌道に乗せるために、DPコーディネーターを中心としたカリキュラムの充実引き続き注力していく必要がある。 ・今後、高等学校段階では、IBDPを用いた進路実現に向けた進路指導の充実が求められてくる。国内外それぞれの進路実現に必要なニーズに応じた指導ができるように、校内体制の確立及び外部機関との連携を進めていく必要がある。
②	<p>教科横断的に探究的な学習活動を展開することにより、主体的・対話的で深い学びを実現する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科横断的に探究的な学習活動の展開については、特にMYPプログラムの学際的単元（IDU）で、教科と教科を概念で結びつけることで、学校での学びがどのように地域や世界と結びついているのか、生徒が振り返る機会をつくることができた。 ・また、1期生のPP（パーソナルプロジェクト）の学年平均点が世界平均を上回る等、生徒それぞれが自身の興味・関心を広げ、プロジェクトを通してこれまでに学んできたATLスキルを発揮することができた。 ・PP（パーソナルプロジェクト）や課題論文を生徒個人が計画的に進めていけるように、各教科での探究学習を充実させ、スキルの習得や協働的な学び、セルフマネジメント能力の向上に一層努めていく必要がある。
③	<p>寮生活における多種多様な人とのコミュニケーション活動等を通して、将来のリーダーとしての人格の陶冶に努める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒は、自治的な活動を通して、様々な場面で責任を持ち、与えられた役割を果たすことで、リーダーシップやフォロワーシップを発揮し、集団への所属感や連帯感を深めることができつつある。 ・昨年度より、多様な文化背景を有する留学生も交えて、高等学校の寮則について協議する機会を設けることで、異文化理解を図ることができた。 ・自治的な活動が充実してきている一方で、実際の生活におけるルールやマナーが守られていない場面も見られる。自治的な取組を寮生活や個々の生活の改善につなげることができるように継続的な支援と指導が必要である。 ・成長期にある生徒が「運動・睡眠・食事」のバランスの取れた生活を実現するための支援体制を構築していく必要がある。
<p>働き方改革 各教職員が限られた時間の中で業務の効率化とタイムマネジメントに努め、「学校における働き方改革取組方針」の徹底を図る。</p>	
	<ul style="list-style-type: none"> ・日頃からの声掛けや業務分担だけでなく、年次有給休暇の計画的な取得、ICTの活用、見通しを持った業務遂行、帰宅時間の目標設定等、働き方改革に対する意識が具体的な行動により一層表れるようになってきている。 ・完成年度に向けて、新規事業が増えていく中で、完成年度を見据えた業務の計画・遂行が不可欠である。特定の教員に業務が偏ることがないように主任等が継続的に実態把握し、年度途中でも柔軟に役割分担を追加・変更するなどして、業務の平準化に努めていくとともに、スクラップアンドビルドの視点から、業務内容を精査していく。